

波田野節子

1940年に柳宗悦が沖縄方言を擁護したことから言語論争が起き、それを皇民化政策で日本語創作を迫られていた朝鮮の作家が脱出口として利用しようとしたのではないかという金在湧先生の話非常に面白く聞いた。

『朝光』1941年3月号の林和と矢鍋永三郎の対談、4月号の金史良と岸田國士の対談の2つの対談を通して金先生は、その様相を考察している。私もこの対談を読んできた。

金先生は沖縄問題が林和と矢鍋の対談には出てこないと言っているが、林和はこの対談のなかで農村の娯楽文化について述べながら「最近、沖縄県の郷土芸術が問題になりましたが」と語っている。これは文化をふまえた言語論争のことであろう。一方、このころ日本語の強制に腐心していた官僚の矢鍋が、前年沖縄の官庁と柳との間におきた言語論争を知らなかったはずはない。つまり、この論争は2つの対談をおこなった4人全員がしっかりとふまえていたのであり、こうした背景を知らなければ、この対談を読んでも表面的にしか理解できないことになる。沖縄と韓国とを結びつける金報告はその意味でとても重要なものだと考える。

ところで、(私は『月刊民藝』読んでいない) 小熊英二は『日本人の境界』のなかでこの事件を扱っているが、それによると、柳が沖縄方言の保護を主張した理由は、単純に地方の方言を大切にしようというのではなく、沖縄の方言のなかに「古い日本語」が豊富に残されているからであった。柳にとって沖縄は「朝鮮や台湾と違って」日本の古い文化を残す場所であった。柳は西洋文化に汚されてしまった日本文化の純粋さを、沖縄文化と方言に見出したのである。彼のこのオリエンタリズム的な態度は、差別から脱出するために標準語を学ぼうとしている現地の人々からも反発を受けたことを小熊は指摘している。つまり、この言語論争は単純に方言撲滅を推し進める官庁と知識人柳の対立というだけではなく、差別から抜け出すために方言をみずから捨てようとしていた沖縄の人たちとの対立という側面も持っていたわけである。

地方文化のなかに古き良き日本を見出そうとする柳の姿勢は、じつは大政翼賛会文化部の地方文化振興政策と軌を一にしていた。すなわち、文化部が言うところの「地方文化振興」とは、いまや中央では消滅し地方文化の中のみ存している「日本文化の正しき伝統」を健全に発達させることであって、本来は外地文化論と関係がなかったのである。

これを台湾の文学者が自分たちに都合が良いように読み替えたことを、柳書琴と垂水千恵は指摘している。[柳書琴：1995、垂水千恵：1995] 同じように朝鮮の作家たちも大政翼賛会の地方文化論を朝鮮語と朝鮮文化を守るために読み替えようとした。矢鍋と林和の対

談を読むと、林和のそうした戦略に巻き込まれないよう矢鍋が細心の注意を払っている気配が感じとられる。

ところが（ここが私と金先生との意見の違っているところだが）、岸田と金史良の対談は違っている。岸田は矢鍋と違い、朝鮮の若い作家金史良にきちんと向き合い、彼の朝鮮語への思いと危機感を受け止めている。また金史良の態度から、朝鮮語創作の存続のために文壇の大先輩の言辞を戦略的に利用しようとする態度は感じられない。

思うに、岸田はこの真摯な対談を通して、自分たち大政翼賛会が打ち出した地方文化論が、朝鮮ではまったく違った受け取り方をされることに気づかされたのではないかと思われる。岸田はこの年 8 月に『台湾日日新報』に出た「外地文化の諸問題」という一問一答の記事で、「極端な同化主義」に反対を表明し、「台湾なら台湾、朝鮮なら朝鮮の特殊性」に立つべきであり、「外地人」がもっとも望んでいることを知らねばならないと語っている。おそらく金史良との真摯な対談は彼にこの態度を取らせる一つのきっかけになったと思われる。文壇から防波堤になることを期待されていた岸田國士がこの翌年にはその職を退いたことには)、大政翼賛会の文化政策の行き詰まりもあったのではないかと想像される。

【参考文献】

小熊英二『<日本人>の境界』第 15 章オリエンタリズムの屈折、新曜社、1998、392-416
柳書琴 「戦争と文壇—盧溝橋事変後の台湾文学活動の復興」『よみがえる台湾文学』東方書店、1995、109-130

「黄得時は「地方文化振興案」を巧妙に運用して、事変以後抑圧されていた布袋戲の解禁を求めてもいる。つまり、大政翼賛文化部の地方文化建設という政策の中に、「地方文化の伝統を維持し発揚する」という一項があり、それを台湾の状況に照らして、台湾には維持発展させるべき特有の郷土芸術があるとし、その中でも布袋戲はまっ先に保存し発展させるべきものであるとしたのである (125)」。

なお、対談のなかで林和は黄海道の仮面舞を出しているが、矢鍋は話に乗ろうとしない。

垂水千恵「日本時代の台湾文壇と大政翼賛運動に関する一考察」『横浜国立大学留学センター紀要 2』1995、102-110

「黄論文はこうした「日本文化の正しき伝統」に繋がる「地方文化」という、『台湾文学』にとっては致命的な論点を巧妙に避けつつ、「地方文化の振興」という大政翼賛会の方針の一部だけを強調することで、『台湾文学』創刊の大義名分として利用したのである。(106)」

「大政翼賛会文化部長の岸田國士も「外地文化の諸問題」(1941年8月28日の『台湾日日新報』4面)の中で、「台湾なら台湾、朝鮮なら朝鮮の特殊性」に立つことを

表明」したという。(110 註 3)

岸田國士「地方文化の新建設」初出『知性』第四卷第七号、1941 年 7 月 1 日。『岸田國士全集 25』岩波書店、1991

大笹吉雄『最後の岸田國士論』中公叢書、2013